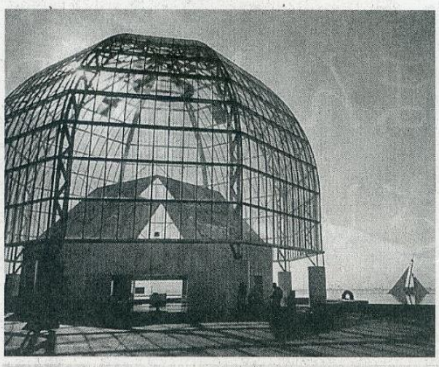
葛西臨海水族園建て替え　問題

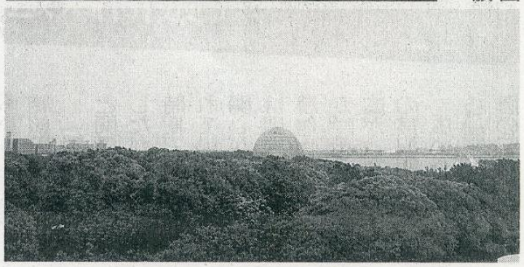
日　新　聞　2024年（令和6年）6月6日（木）夕刊　4版　文化　4
culture　文化

▲寄稿　葛西臨海水族園建て替え

失われゆく次世代のコモン

松隈洋（神奈川大教授）





上建て替えが計画されている葛西臨海水族園
下鬱蒼と茂った森の奥に見える葛西臨海水族園のガラスドーム＝いずれも松隈洋氏提供

私たちは未来の子供たちに、誰のものでもない、市民のよりどころとなる公的な共有地＝コモンを残すことができるのか。それは先人たちが長い時間をかけて守り育ててきた風景に対する理解と敬意があってこそ、はじめて実現できるものである。今、東京都が推し進めようとしている葛西臨海水族園の建て替え計画は、そのことを無視した歴史の切断であり、そこに込められた環境形成の哲学の放棄に等しい思考停止の愚挙だと思う。

1989年に竣工し、「水族園」と名づけられたこの建築は、単体の閉じた一施設として構想されたのではない。高度経済成長下の建設廃材の埋め立て地だった東京湾岸の荒涼とした敷地を、自然との共生を取り戻す緑に覆われた樹林帯と水辺へと修景する壮大な自然環境の再生事業として立案された。計画は82年、「高度の文化性、芸術性、創造性を要求されるものについて、その施設にふさわしい設計候補者を選定する」ことを目的に設置された選定委員会による建築家・谷口吉生の大抜擢に始まる。選定理由には、この建築が「従来の建物中心の水族館とは異なり、園全体を用い」て「生態系への理解を深める」施設であり、谷口が「周囲の自然との調和を配慮したオープンスペースの取り扱いに優れて」いる点が挙げられていた。

そこで谷口が試みたのは、建物の存在感を極小化して、むしろ、目の前に広がる東京湾と修景によって新たに生み出される樹林帯を引き立てる環境造形と呼べる方法である。こうして、延べ床面積約1万5000平方㍍の巨大施設にもかかわらず、直径100㍍の円盤状の浅い池の下に水族館本体を埋め込み、ガラスのエントランスドームだけが象徴的に地上に顔を出すシンプルな造形が出来上がる。そして、水族園の竣工は始まりに過ぎず、谷口は、引き続き関係者と共に周囲の樹林や水景の計画を練り上げ、35年をかけて樹林帯を大切に育て上げていく。その地道な営為が、新宿御苑の1・3倍の規模となる77万8600平方㍍の広大な緑あふれる現在の葛西臨海公園を誕生させたのだ。

しかし、こうして人工とは思えないほど鬱蒼と生い茂った樹木1700本のうち300本だけを残し、600本を伐採、800本を移植し、現在の1・5倍の巨大な周囲に閉じた要塞のような新しい水族館が建設される。そこには、建築をつくることは余白としての庭園を生み出すことだという環境形成の哲学は存在しない。しかも、失われるのは貴重な自然だけではない。民営化により入館料は数倍になり、誰もが等しく自然環境を学ぶ社会教育的な性格は大きく損なわれ、公園全体が商業化されたテーマパークに変質することはあきらかだ。

去る5月19日をもって閉鎖された「水辺の自然」エリアの「生き物」については、「地元小学生の皆さんにお手伝いいただき、現在の水族園のバックヤードへの『引っ越し』を行います」と公表された。だが、その子供たちに、「どうして35年をかけて大切に育ててきた木を切って水族館をつくるの？　木には命はないの？」と問われたら、何と答えるのだろう。

＜市民社会には私たちの場所があるべきである。それは、真に私たちのための場所であり、私たちが共有しているもののためであり、共有の中で私たちが育っていく場所である。その場所は民主的でなければならない。＞（ベンジャミン・R・バーバー著、山口晃訳『＜私たち＞の場所―消費社会から市民社会をとりもどす』慶應義塾大学出版会、2007年）

政治学者のバーバーがこう呼びかけたように、求められるのは、未来の子供たちが市民として育っていくことのできる私たちの場所、コモンの創出であり、ないがしろにされているのは、この場所を守り育ててきた人びとの自然環境再生への希望なのだと思う。

（まつくま・ひろし）

モダニズムが育んだ場所

「生活の根拠地」求めた日野市立中央図書館

本との出合い 身近に

松隈 洋（3）

Studies スタディーズ

全国各地で書店が激減している。2022年、書店が1軒もない市区町村が26・2%に上ったという。それは、書棚の本を眺め、本を手に取れる生活環境を身近に持たない住民が、市区町村レベルでは4分の1もいることを意味する。

地域の格差拡大

戦後、全国各地に多くの公共図書館が建設された。22年の統計では、総数3305館、自治体別の設置率は、都道府県立100%、市区立99%に達する。また、近年は、ぎふメディアコスモス（15年）、富山市立図書館本館（15年）、石川県立図書館（22年）など、複合化、大型化する個性的デザインの図書館が次々と誕生して来館者も急増し、美術館をしのぐ地域のイメージ・シンボルとなっている。

一方で、町村立の設置率は58%で地域格差は拡大している。誰もが等しく、知らない世界に触れる機会を与えてくれる本との出合いの場は、今後どうなっていくのか。戦後の歩みを振り返るとき、ふたつの建築が浮かび上がってくる。

そのひとつが、敗戦直後の1947年5月、闇市とバラックが立ち並ぶ騒然とした東京・新宿に、清新な姿で開店した木造の紀伊國屋書店である。創業者の田辺茂一（05～81年）は、21歳の時、父の営む薪炭問屋の空き地に自らの設計で初代の書店を建てたが、45年5月25日の空襲で全焼し、廃業も考えたという。

しかし、戦地から生還した元店員からシベリアでも紀伊國屋の名を軍隊仲間が知っていたと聞き、再建を決意する。そして、偶然訪ねた戦前の木造住宅の豪壮な茫洋さに惹かれ、設計者の前川國男にすべてを託したのだ。人びとは食糧難と住宅不足に喘いでいた。だからこそ精神的な飢餓から脱したいというその願いに応えるべく、田辺は、街の書店を「学問の緑地帯」にしようと志したのである。

当時は戦前から続く建築資材統制下であり、建設は、電信柱や座敷用の磨き丸太を構造材に転用するなど、資材難や、戦争で荒廃した建築技術と低下した未熟な職人のやっつけ仕事に苦しむことになる。それでも、前川は、ル・コルビュジエに学んだ、流れるような平面構成と吹き抜けのある明るく伸びやかな店内とモダンな外観を創り上げていく。2階洋書部の壁には、田辺の収集した荻須高徳（01～86年）の油絵が飾られた。

50年、この真新しい書店に魅せられた1人の建築学生が、前川の事務所に入所する。鬼頭梓（26～2008年）である。歴史の偶然は、入所した鬼頭に、開架式の閲覧室を持つ神奈川県立図書館（54年）と、受付カウンター上部の梁に「真理はわれらを自由にする」という言葉が刻まれる国立国会図書館（61～68年）の設計を担当させる。

また、夫人の鬼頭営子は、51年に進駐軍の民主化政策で設立された慶應義塾大学図書館学科の第1期生として、後年、国際基督教大学図書館の館長になる。こうして、鬼頭の自宅には若い司書たちが集い、民主主義にふさわしい図書館を求める熱い議論が交わされていく。そのつながりから、64年に独立した鬼頭が、東京経済大学図書館（68年）に続いて手がけたのが日野市立中央図書館（73年）である。

この時、初代館長となる前川恒雄（30～2020年）は、すでにイギリスの地方図書館を調査し、図書館になじみのない市民の元に本を届けようと、小型バスを改造した移動図書館ひまわり号を走らせていた。そして、前川から「親しみやすく、入りやすい、歳月を経るほど美しくなる図書館」というテーマを示された鬼頭はひまわり号に同乗し、青空の下で繰り広げられる本と市民の触れ合う光景に感動する。こうして、「生活の根拠地」としての図書館を求めて完成させたのが、この図書館だった。鬼頭は、図書館への思いを次のように書き留めている。

民主主義そのもの

「私にとって、現代の図書館のもつ意味は、民主主義そのもののもつ意味とほとんど重なりあっていた。（中略）密室から解放され、権力と権威による独占を排して万人のものとなろうとする知識は、その新しい展開の場所を求めた。それは（中略）身近で平明で開放的な空間でなくてはならなかったし、（中略）活動的な場でなくてはならなかった。」（「図書館建築雑感」「建築文化」1976年7月号）

戦時下に青年期を送った鬼頭にとって、図書館は、二度と戦争を起こさせない民主主義を育む場所であり、そのためにも、「図書館は皆のものであり、本の場所であり、そして私一人の場所でもある」という信念から、戦後図書館のあるべき姿を切り開こうとしたのだ。だからこそ、鬼頭の図書館には、一人静かに本と向き合う人びとの姿がある。このふたつの建築は、本のある風景と公共図書館が私たちの身近に存在することの意味を静かに語りかけている。

（神奈川大学教授）

誰もが自由に本を手に取れる空間を目指し、鬼頭梓が書棚なども設計した日野市立中央図書館（東京都日野市）

前川國男が設計した紀伊國屋書店（東京都新宿区、1947年）＝渡辺 義雄撮影